

シュニトケ、

その色彩

中

二帖

シュニトケ、その色彩
中
二帖

ひざまづいて。加奈子が言った。家畜みたいに。四つんばいになって。ひざまづいて。「なんで？」見たいから。窓越しに海が見える。ダナン市の川沿いのホテルの部屋。閉ざされた広くない空間の中に2人だけの息遣いと、感じられた彼女だけの体温に執拗な親密さを感じ、わたし、と、見たいから。ん？



「お前がひざまづけよ」私が言うのを無視して、いいから、...ね。よつんばいでひざまづいて、「もう、」そして「お前のほうが、」...ね？お尻、振って見せて。「たまらないでしょ？」泣いて見せてよ。「欲しくってさ」嘲笑った声を聞き乍ら加奈子がベッドの上で、開いた股を上下

させた。両手のひらを太ももに添えて押し開き、窓越しに立ったままの私になど眼をさえくれずに、「おかしいの？頭。」彼女が「狂っちゃった？」私の声だけを聞いた。…もとから。加奈子の、「もとからだよ」と、狂ってるの？その声を、生まれる前から？。聞いて、私は「狂ってるの。わたし。生まれる前から。」声を耐えて笑い、大津寄皇紀は口を開いたまま涙を流した。あの時、それは何の比喩も含まず単に穢い涙だった。それは泥と皇紀自身の血に穢れた。だらしないうろはしさを曝した、その開かれた口に、入りきらないほどの棍棒が何か、飲み込ませてやりたい欲望に駆られたが、皇紀は思いつめたまま半ば失心した表情を曝し、次の瞬間前のめりに倒れた。コンクリートの床面に、鼻をさえぶつけてしまったに違いなかった。新しい自分の血にまみれる。新しく決壊した血管が血を吐き出す。皇紀が壊れていくことについて私は快感をさえ感じていた。発熱があった。もっと惨めに壊して仕舞いたかった。日野市の、多摩川の河川敷、その土手沿いの行き止まりの廃屋の中に彼＝彼女が逃げ獲る場所は無かった。倉庫跡地のその、二人だけの空間に連なる私と皇紀の呼吸の音を聞き、傍らに錆びた鉄骨が夜の光の中に錆びた匂いを立てて、もっと、と。残酷なほどに壊して仕舞獲るなら。一人の人間に加え獲る暴力の、或いは一人の人間が体験し獲る破綻と崩壊のあまりのみすぼらしさに、寧ろ私は恐怖した。逆光の中に見いだされた私のみすぼらしさをさえ。最早無抵抗な皇紀のずりさがったズボンを脱がせ、私はその男装を解いて裸に剥いた。無残なほどに女らしい体をしていた。皇紀がどんな思いでその体を眺めたのかわりたかった。彼あるいは彼女は失神などしていなかった。痙攣的に体を震わせ乍ら、むしろ私の事など無視したままに、自分の苦痛と自分の絶望の中に埋没し、酔いしれ、恍惚とさえている気がした。自分勝手に。その穢らしさに我慢ができず、失心寸前まで殴り、蹴り上げ、その神経を削った。四つんばいにさせ、彼女が生まれて初めて知ったばかりのはずの私のそれを、その上の彼の肛門に入れた。崩壊した喉笛がガラガラ猫のように立てる音の痛さの向こうで何度も咳き込み乍ら、皇紀は涙は流したが、泣きはしなかった、と思った。涙腺が壊れただけに過ぎない。皇紀は何もかも壊れていた。残酷な時間を限界まで、可能な限り永遠に限りなく近く引き伸ばすために、皇紀を壊しきることなどしない。私は引つつかんだ髪の毛で半ば引きずりながら、多摩川の土手に全裸の皇紀を放置した。持ち去った衣類ははるか向こうの、やっと最初に目に付いたごみ収集ボックスに捨てた。出会ったばかりの、皇紀がまだ二十歳くらいの頃、その、そして、突っ立って壁に手をついたまま鼻先に加奈子が尻を突き出して、ひざまづいた私とその肛門に舌を触れてやった時に、彼女の尻の皮膚が一瞬、遅れて、痙攣して頬をはじく。加奈子が大袈裟な声をわざと立てて声を立てて笑い、由紀乃は加奈子の実母ではなかった。私の舌はもう一度その肛門に触れたが、彼女は由紀乃の前夫が死んだ妻との間に作った子供だった。古い写真をスマホで写した画像データで、実母の写真を見たことが在る。加奈子とはどこも似ていないことが、加奈子が父親似であることを照明した。「広島でトラック転がしてたらしいよ」加奈子が言った。「長距離のドライバーで、名古屋かどっかそこらへんで事故って死んだって」彼女が髪を掻き上げるたびに「宮島って行ったことある？」あるの？「すごい、綺麗」髪の毛の匂いがうろ雑多いほどに立つ。「お父さんと一緒に？」…ないよ。加奈子の声が鼻にかかり、「汪と行った」言って、笑った。日本に居た頃、日野市にあった桜桃会の道場によく行ったものだった。雑居ビルを棟まるごと借りて、入った正面の突き当たりに汪の社長室と同じ八紘一宇の額が飾られていた。軍服を模した制服を着た十人ばかりの男たちが畳敷きの道場に正座して、由紀乃が生け花を教えた。それらの人々の背中中は身じろぎもしなかった。列の中央に明らかに小さい華奢な背中が在って目を引いたが、それが皇紀であることはまだ知らなかった。加奈子は私の髪の毛に触り、いじり乍ら、その指先は私の所有権を誰にでもなく主張して、顔を上げた由紀乃は私に笑いかけた。《一殺多生》の額の右と左に日章旗と旭日旗が飾られて、義足の汪はパイプ椅子に腰掛けたまま、おかしくも無いのに声を立てて笑う。みんな、死にたがってるよ、と汪がいつだったか言った。なんども繰り返して、彼らの忠誠を試すように、独り語散るように口走って「死にたい？」汪に話しかけられて、小林雄太と言う太った日本人は細い目に笑みを浮かべもせず、「死にます」言った。いつか中国が責めてくよ。汪が時に彼らに訓示を垂れた。中国、強いよ。「知ってる？」いっぱいいるから。一人一殺、「もうすぐ、」…駄目。一人十六殺で全滅。「死んじゃうの。」韓国も。アメリカも。「あいつ、今まで」大変よ。何人殺すの？「ずっと、」何人殺して全滅なの？「悪いことばっか、してたから」生きちゃ駄目。「もう死んじゃうの」生きようとしてます。それ、負けます。「もう末期だから」死になさい。アメリカは日本、「…癌なの」手放さない。今、日本、「体中、…ね。」アメリカの殖民地よ。独立しなければいけない。「切ってもくれない。」どうするの？「知ってた？」ワシントン、ニューヨーク・シティ、「放射線とか、」攻撃するよ。「抗がん剤とか、」ホワイトハウス、燃やすよ。「もう、駄目だから。」アメリカ、要りますか？「知ってんだよ、」皆さん、アメリカ、「本人も。」要るの？要らないよ。「けどさ、」アメリカ、もう、駄目。「あれで、まだ」壊さなきゃ。「死なないって」壊して、「思ってるの。」作り直します。「笑っちゃう。」国なんか、もう要らない。「死にかけなのに、」日本も、アメリカも、「自分自身が。」中国も。「なんでだろう？」要らない。どこで作るの？「死ぬっていう」新しい国、「コンセプト、」どこで作るの？「無いのかな？」ここよ、といて、汪が自分の頭を、そして胸を指さして、「馬鹿なの？って」その老いたしわだらけの指先が「でも、…ね」ときに震えているのを私は見逃さなかったが、「もう終わってる」耳打ちする加奈子の声が、発されるたびに彼女の息の温度がかかる。寄り添うよ

うに正座した至近距離に、加奈子の体温があった。私は彼らの背後で正座して、汪の訓辞を聞く。「死になさい」汪が不意に叫んで、死にます、彼らの全員が叫び返す。「死になさい」声を立てて、死にます。「死になさい」加奈子が、死にます。笑う、耳元で、そして十回近く繰り返されるコール・アンド・レスポンスが、見苦しい死にかけの老人と若い彼らの体温を上昇させて、「解散」叫んだ汪の声に応答した彼らが一度に立ち上がった時に立てた一瞬の音響の消え去らない前に、皇紀と目が合った。誰もと同じように白目を、顔を上気させて、上昇した人々の体温の湿気と、束なりあった体臭が匂う。フィリピン生まれの汪は二十代の時に海を渡った。合法的な手続きを経たのかどうなのか私は知らない。覚醒剤と銃器を売りさばいて、彼の中国語には聴解困難なほどのなまりがあったと、桜桃会の中国人から聞いた。中国人との商談にはカンボジア人の女が通訳した。ポルポト政権下のカンボジアで捕まえたベトナム人の男が若い頃の彼の相棒だった。ベトナム軍の兵士だったLê Guyên Phươngレ・グイン・フンは黎源薫、れいげんかおる、あるいは源薫、みなもとかおる、と名乗らされて、汪にゲン・クンさんと呼ばれ、レ・ゲン・クンさんと呼ばれ、かおるさんと呼ばれ、黎さんと呼ばれた。九十年代にはすでに故人で、私は彼に会わなかった。古い白黒写真の中の源薫は大柄で痩せた、目の細い男だった。十代に見えた。もう一枚の褪せたカラー写真では、太った、顔の贅肉が眼を押しつぶしたような顔を曝していた。同一人には見えなかったが、鼻筋に名残があった。加奈子がお見舞いに行こうと言ったのは、私がまだ三十歳半ばの頃だった。「誰の？」声を立てて笑う加奈子を眼で追って、私はすでに、その頃には老いさらばえはじめた私自身を嫌悪し始めていた。「あんたが自分で強姦したんでしょ？」思い出す。「ぼろぼろに。」その時、皇紀を強姦してから一週間以上たっていた。「食べるたびに吐いちゃうらしいよ」忘れはしなかったが「げえー、って」覚えてもいなかった。声を立てて笑う加奈子の軽蔑的な表情は見慣れている。病室の中で、皇紀は顔を包帯でぐるぐる舞にされ、右の白目に出欠の痕があった。両手に、そして左足の全体に包帯が巻かれて、体を巻いたそれらは衣服の下に隠され、確認できなかった。私は、私の暴力の結果を見つめた。皇紀は表情さえ変えなかった。「元気？」声をかけて、「よくなった？ちょっとは。」加奈子は皇紀の束ねられた長い髪の毛の全体を手のひらに撫でてやり、「なんでもないよ」皇紀の、負傷のためにひしゃげた声は隠しようもなく女声のそれに他ならない。食事が運ばれたときに味のない、くすんだ白さを張らせたおかゆを口に運んでやり、開かれた口が不器用に匙ごとくわえ込もうとして、ゆっくりと鼻から息を吸い込みながら、「あいつ、壊しちゃって」皇紀はそれを飲みこもうとするが、

「誰？」

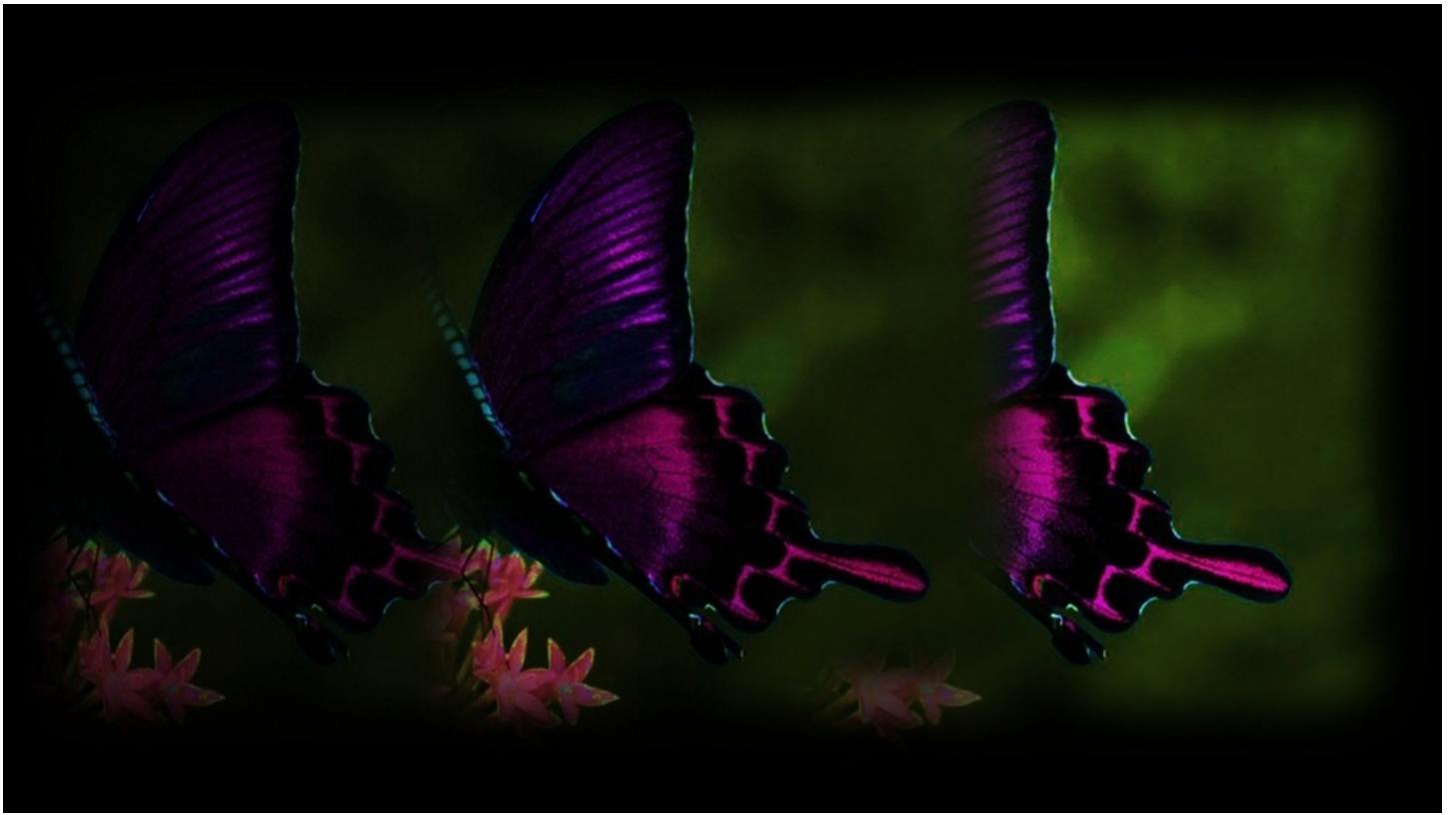


「...皇紀。あいつ、」舌に痛みがあるのか「なんで？」眉をひそめて「すっげえ、むかつく。まじで」口の中で痛んだ舌が「殺さないくらい。まだ、かろうじて...」上下したのを私は「死に切れないくらい」その頬に察知する。「...ね？」言って、ふたたび肛門から舌を離れたあとで、息を吹きかけて笑い、彼女の指先が肛門に侵入していくのを私は感じる。痛い？加奈子が、痛くない？と言って、私の性器を左手につかんだ。その時、皇紀たちが奥多摩に合宿に行っていたのは知っていた。皇紀は桜桃会の副主将だった。主将になることは辞した。最初の首相はミャンマー一人がなり、彼が死んだ後、次はベトナム人だった。皇紀は汪に寵愛された。かつての中国人たちが愛したそのままの、小柄な、愛くるしい顔立ちの女には違いなかった。纏足さえしているような、ちぐはぐな歩き方をした。加奈子の借りている六本木交差点近くの教会の前の古いマンションの最上階から、東京タワーが見えた。私の肛門の中で指を動かし乍ら、くわえ込んだ舌が不器用に私のその先端を愛撫するが、垂れ出した自分の唾液の匂いを彼女は鼻先に嗅ぐ。加奈子の豊満な、あるいは肥満しかけた身体が、私の太ももから足先まで羽交い絞めにして、「薫さんはいい人でした。いつも」彼女の身体は確かに過剰なほどに女の「彼だけ能力が高い。」それだったが、私は「頭もいい。最高の」彼女がいつも嚴重に巻かれたまかれたさらしのような「...迷わないよ。私は、」下着で服の下に「彼は。日本人なんか、みんなチキンよ。」がんじがらめにして、その身体の気配さえ外に「だって、尾上なんか、あれ、」漏れ出さないように「彼らはチキン。日本人、」拘束したが、抜き出された指先を「にわとり。ほら、でもね、」自分の鼻につけた加奈子は「みんな、自分が死にたいと思ってないから、」私の体内の匂いを嗅ぐ。「...分かるでしょう？人も殺せないよ。」赤坂の末端のやくざが集団で道場を辞した後で、私に耳打ちし乍ら言う汪に笑いかける。皇紀は事務所スペースでお茶を入れる。目線が合う。笑いかける。皇紀は笑い返さない。まだ紹介されても居なかった。汪に惹かれたわけではなかった。覚醒剤で二度目に捕まる前、ホストクラブを経営し始めたころに慶介が紹介した、いかがわしい夜の街の有名な一人に過ぎなかった。自分ではいっばしの権力者でもあり、実力者でもあるつもりだった。実際には、それは自分の半径数メートルの中での現実にすぎなかった。私が汪を離さなかったのか、汪が私を離さなかったのか、そのつながりには加奈子も介在していたし、皇紀も介在していたかも知れなかった。いずれにしても、必ずしも私たちはお互いを求め合っていたわけではなかった。「...ねえ」言った加奈子を振り向くと、後ろに立った加奈子はそのまま私を羽交い絞めしたが、「妊娠した」そのとき、まだ会って何日も経っていなかった。「...俺？」と言ったあとで、汪に違いない、と私は確信した。汪が身の回りにはべらしている女たちはみんな彼の手が付いていることは知っていた。慶介もそう教えたし、汪の腹心の藤木博という弁護士も冗談めかして言っていたが、彼らの事務所に行けば、そんな事はすぐに気付かれた。確かに彼らはお互いのことを知り尽くしている、希薄で、すてばちで、馴れ合いの、いい加減な親密さがあった。「まさか」と言って笑って、加奈子は指先に私の顔をなぞるのだが、彼女は無理をしているような気がする。いつでも、と、思い出す限りの彼女の無理をあげつらおうとし乍ら、知ってる？

「...ねえ」彼女は言った。「知ってる？」なんであんなに女ばっか、「何人目だと思う？わたし、」はべらしてんのに「妊娠するの。最初は」...さあ、ね。「十八歳のとき。ほんと、」なんでパパ、子どもが一人も「子どもだったんだけどさ。もう...」いないのって「いまや、結構、」...ね、「年、取っちゃったけどね」なんで？「...ね？」なんで？って、「何人めだと思う？」思わない？

「いるの？...」インポだもん。...ね？「こども、いたの？」知ってた？駄目なの、あいつ「いないよ。ぜんぶ、」笑っちゃうよ。ママも「墮ろしたもん。」そう、だからさ、ママ「何人？」もう何年もさ、「四回目？...」...ね？「やばいよ。」ヴァージン状態「知りたくなってくる。」笑っちゃう。くにやって「何回墮ろしたら、妊娠しなくなるんだろう？...てか、」くにゆって、ぬちゆって、まんこのとこでさ「もう、生めなくなってるのかな？」つぶれてんの。入り口んとこで。「...ね？」けど、ね。けどさ「受胎しできなくなったり？...ね？」本人、入ってる気なの？「どう思う？これ、この子、」あえぐよ。あいつ「処理したら、次、」でもさ、くにゆくにゆしてるとき「次は本気に作ってみる？」勃たせたげないって「何を？」...思うよ。まじで

「まだ、見たことのない風景。」勃起、どーんって「何が、生まれると思う？」...ね？笑った加奈子の息が私の鼻にかかる。私はその匂いを嗅ぐ。魚の骨が付着したような匂いがある。制裁します、と言った皇紀に先導されて、「あなたも、見ますか？」



赤坂の事務所ビルの地下に入って、監禁されたミャンマー人を見たときには、もう、彼らと出会って三年近くたっていた。もう一人の妊娠を加奈子が処理した直後だった。私の種かも知れず、ほかの男の種かも知れなかった。殴打され、リンチの果てに、文字通り血反吐に汚れた一人の男が、全裸に剥かれたままで崩れるように体をくの字に曲げていた。二人の男がミャンマー人を監禁していた。彼らは確か、カンボジア人と、フィリピン人のはずだった。彼らは桜桃会の軍服を身に着けて、汪に与えられたピストルを腰にぶら下げていた。三人とも桜桃会の会員だった。汪はやりたい放題だった。何が起こっても、名義は汪ではなかった。忠誠を誓わされた従者たちは彼のために刑期を勤め、汪は法的には一切存在さえしないままに、気まぐれに彼らを支配した。或いは、支配する気もなく、ただ、かわいがってやるだけなのかもしれない。何を強制するわけでもなかったのだから。汪の下僕たちは、彼に対して自由を放棄することによって、自由を獲るのかもしれない。あるいは、汪の金で建築事務所を作った私と同じように。

腐った血の匂いがした気がしたのは、気のせいかも知れなかった。もはや焦点のあわない眼差しが皇紀を認めると、ふらつきながら、それでもミャンマー人は立ち上がった。彼は歯が折れていた。顔は腫れ上がって、原形をとどめなかった。華奢な皇紀がこんなことをしでかすとは思えなかった。あなたが？言った私を、皇紀は振り返って、「...え？」あなたたちが、これを？「これからですよ」と言った皇紀は木刀で、ミャンマー人の身体を文字通り破壊した。ミャンマー人はかたくなに倒れない。たったまま、文字通り血反吐を吐く。十代の頃、必ずしもまじめだったわけではなくて、犯罪まがいのことばかりしていた私でさえ、初めて本物の暴力を知った気がした。私が体験した暴力など、ただの男のたちの行き過ぎたスキンシップにすぎなかった。骨がへし折れる音を聞き、内側で内臓が潰れ、破れた血管が好き勝手に筋肉の中に血をぶちまける音を聞いた。何をしたの？耳打ちした私に、フィリピン人は「寮に行きました。」りよにきまった。表情を無理やり無表情に「誰が？」維持し乍らその「大津寄主将が」おおつきすそうが内面で何か「見ました」戦っていたが、それは「何を？」葛藤とはいえない。「ビデオ。女の人の」彼は彼が拒絶しようとする「アダルトビデオ」何かの噴出を押し留め「見ましたから、制裁します」何かから逃げようとし乍ら「それだけ？」耐えている。「たった、」ただ、直立して。「それだけ？」部屋に行ったら、彼はポルノ商品所有してて。駄目だから。私たちは。そう言うのは「規則なんですか？」制裁に一段落つけて木刀の血をカンボジア人に拭かせる皇紀に「そういう、」言うが、...いいえ。言って振り向く皇紀は「規則とか、そんな...」一瞬、噴き出して笑い乍ら「あたりまえでしょう？」早口に口走らせるが「恥でしょう？穢いものに触れて、」私をとがめだてはしない。「それで国が守れますか？」

「国を守る気ですか？」

「当然。」フィリピン人が容易した真剣を抜こうとした瞬間に、「ちょっと待って、」思いなおして「すみません、...ね、あの、...ね？」皇紀は言う。「冗談だと思ってたんですか？」半分抜いた刀身が光っているのを、確かにそれは美しい。「桜桃会を？」美しく、痛い。「いいえ」私は曖昧を許さない皇紀の直視した眼差しに、そう答えるしかない。不意に皇紀は一度おさめた刀を神棚の前に立てかけて、私に一瞬眼を走らせたあと、自らの軍服をはだけた。上着の中のシャツの色彩の白が飛び込んできたのを確認するすきもなく、外されるボタンが皇紀のさらしを巻かれた上半身をちらつかせ、はだだけさせられた軍服の中で、やがて外されたさらしは皇紀の豊かな乳房と、腹部のあきらかに女性的な曲線を曝した。フィリピン人もミャンマー人もまっすぐに正面を向いて、起立したまま、皇紀の背後で痙攣しているミャンマー人の体の上に投げ捨てられたさらしは、すぐさま血をすった紅に汚れる。



美しく、扇情的でさえある、あからさまな女の身体だった。どうやって隠していたのだろうと違和感さえ感じ、軍服を両手に開いて、皇紀はフィリピン人に言った。「見ろ！」皇紀の叫び声は「何が見える！」空間をひりつかせ、「言え！」震えた空気は反響する。「何も見ません」叫んだ なにもみません フィリピン人を皇紀は殴った。ありがとうございます、と叫んだフィリピン人の鼻から ありがとうございます 鼻水が散る。「嘘だ！」皇紀が叫ぶ。「見ろ！」カンボジア人は「何がある！」寧ろ天井を見上げて「何を見る！」背中を震わせ乍ら、「女！」叫んだ瞬間に彼は皇紀に殴打され、くの字に曲がったからだの頭部は蹴り上げられて、止まない皇紀の制裁を留めるものは居ない。息も切らさない皇紀の一方的な暴力が、カンボジア人の意欲の全てを削り取った時、彼は雑巾のように倒れて、泣きじゃくっているに過ぎなかったが、むしろ、彼がどうしようもない高揚感に包まれて、恍惚とさえしていることが、私に眼を逸らさせた。「冗談じゃないんです。」振り返った皇紀がわたしにそう言っているのは知っていた。淡々と「本気なんです。冗談じゃ、」そして私は、「...何もできない」皇紀から眼をそらしたまま、「死にたいか？」言われたフィリピン人が、「死にます」叫んだとき、しいまっ いつか汪が言った。死にたいですって答えちゃ駄目なの。笑いながら彼は、桜桃会だと、たい、駄目。思います、駄目。です、ます。...それだけ。「...待て」やさしく、皇紀は諫めるようにつぶやき、もはや残骸でしかないミャンマー人の腹を殴って、「お前は！」叫んだ小柄な皇紀を彼は見上げる。ミャンマー人が、まだ息をしているのが不思議だった。言葉も発せない彼は、ついに、倒れるようにひざを折りながら皇紀の足にすがりつき、必死に何かを乞うたが「立て！」叫ばれる前から、彼はそれを求めていた。転がり落ちそうになりながら彼の手は皇紀を放さず、すがりつきながら立ち上がろうとし、それは最早凄惨な苦闘にすぎなかった。両腕がでたらめに痙攣し乍ら、ようやく皇紀にしがみつき、その腕が皇紀を抱きしめ、血にまみれた泥色の黒い顔がその真っ白い乳房に埋まる。荒い息を間歇的に上げ続ける。唾がたれ、血があふれる。私は息を止め、そして何秒か数えたその瞬間、皇紀は彼の髪を引っつかんで引き剥がす。彼の眼差しが何かを見つめた。フィリピン人が差し出した刀を引き抜くと、皇紀は当てた首を一気に引いた。火が噴き出して皇紀を染めつくし、血しぶきを浴びながら皇紀は首を落とはじめた。確実に絶命していた。私は身を丸めて吐き乍ら、確実に今、彼らは私を軽蔑したに違いないという屈辱感に苛まれたが、彼らの視界にさえ、私はもやは存在しなかったのだった。

来て、...ねえ。

「来てよ」と、その加奈子の声を不審に思って、どうしたの？「来てよ」わたしはその時、まだ皇紀を強姦したわけではなかったし、瑞希もカンボジアに逃げ出しもせず、汪もまだ生きていた。夏だった。桜桃会の夏合宿が終わってすぐ、「どうしたの？」その電話の後で、スベアで鍵を開けて、入った加奈子の自宅の部屋の中で、彼女が床の上に仰向けに倒れているのを見つける

。...やられた。加奈子は言った。かすり傷がある程度だった。服は引き裂かれるように剥ぎ取られて、そこらじゅうに転がっていたが、カーペットの上に横たわったまま、「桜桃会だよ。あいつら、」泣きそうだった。いきなり、「ねえ、殺してやっていい？」でも、さ、知り合いじゃん、で「なんか、十人くらい」話し合おうかなって「ほんと、むかつくんだけど、」なんだろう。悲しいけど、なんか、「来たんだけど。」いまいち、
...ね？

むかつけなくてさ「あいつら、ほんとに。」やらせてやったよ。なんか「外人ばっか。...薄汚くてさ。あ。」哀れに為ってくるの「...独りいた。日本人も。本田だよ。あいつ、」自分が、なんか、かわいそうでさ「皇紀なんか、あいつ、来もしなかったけど」わかる？「あいつ、くそ。」わかんないよね？「皇紀だよ、絶対、わたし、」またしも「まじで、あいつはくそ」わかんないもん？何言ってんの？「やらせたの、絶対あいつ」わたし、と、いつの間にか茫然としながら言葉を呟き始める加奈子の頭を撫でてやり乍ら、部屋の中は乱れていた、実際には、加奈子は相当暴れたに違いなかった。叩き割れたグラスや皿の破片が散乱し、ひっくり返った椅子の足が、液晶テレビをひっくり返していた。外れかけたカーテンが雑な反射光を床のカーペットの上に投げている。彼女の背中は床全面に張られた白い毛の長いカーペットの触感を感じているに違はなく、それは、一番町の池の周りの古いマンションの高層階だった。建物の古い上品さと、ののしる加奈子の猥雑さとがちぐはぐで、私はカーテンを手繰って、外の池を見下ろした。「お前、やらせたろ？」呼び出した加奈子に詰問されるが、いいえ、と、皇紀が答えたのはその一言に過ぎない。何人、殺したんですか？言った私に「...お前以外にいないから」四人くらい？

「お前がやらせたんだろ？あいつらに」
皇紀は「あいつら、」本当にやったんですか？加奈子に問い返したが、口答えすような返し方に、寧ろ扶美香は声を立てて笑った。...でも、外人ばかりだから。皇紀がそう答えたのは、あの制裁の直後だった。「姫を、本当に、強姦したんですか？」...あ、でも。「誰が、ですか。誰と、誰と、」日本人も居ますけど。「誰ですか？」名前を挙げる加奈子の、そして彼女に挙げられた会員たちは皇紀に呼び出されるのだが、「大丈夫ですか？もう、社長には」悪い枝は、切ってあげないと。でしょ？「姫に何かあったら、」変な意味なんかないです。ただ「社長が悲しまれますから」全体を良くするため。血にまみれた体にそのまま、血に汚れたままのさらしを巻き、皇紀はそう言った。「パパ、知ってるよ」
「何と、おっしゃってましたか？」

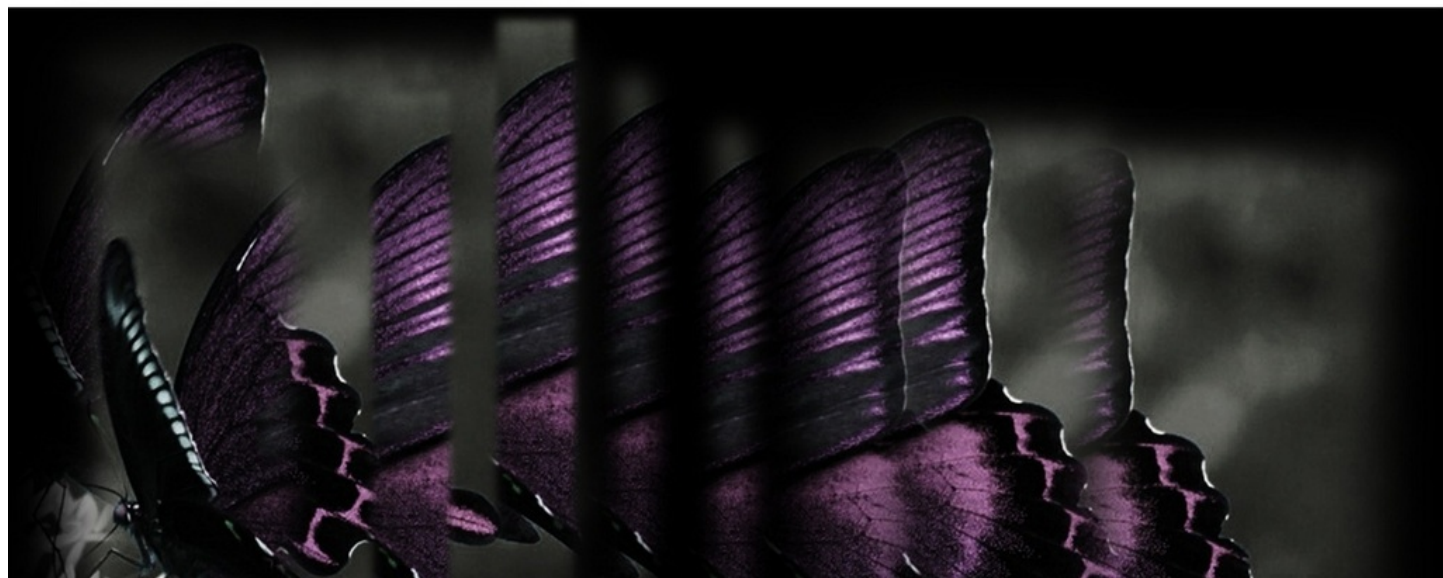
「あんたに任せるって」...そう、と、独り語散るように言った皇紀の伏目がちな眼差しが、少なくとも何かに本当に悲しみを感じているには違いなかった。責任取ったら？あんたが。扶美香が言った。どんな？問い返したのは加奈子で「ハラキリ。決まってんじゃん。右翼でしょ、あんたたち」声を立てて笑い、皇紀は言った。いいですよ。いつでも。切りましょうか？いま。加奈子が怒りに燃えているわけではないことは知っていた。面白がっている気さえした。呼び出された会員たちの顔を加奈子は見詰めることができなかった。顔を伏せたまま、そっぽを向き、その瞬間、ほんとだったんだ、と扶美香は呟く。



本当にやったのなら、貴様ら一人ひとり、おれが斬る。皇紀が言った。「やったのか？」独り一人問いかけられる彼らはすべて、はい、とただそれだけ答えた。彼らは一列に並ばされ、その前に立った皇紀が一番背が低く、男装し乍らも、誰もがその性別は一と目で見破れた。分かった、と言って背後に回り、刀を抜いた皇紀は微笑みさえしていた。それが一瞬で消え去った瞬間に振り上げられた刀が彼らの背中を打っていった。すぐにそれが峰撃ちに過ぎないことは気付いた。とはいえ、鍛えられた鉄で肺のうしろ強打された彼らは息を詰まらせて、直立を維持しようとするが、体は捻じ曲がる。制裁を終えた皇紀は加奈子を振り向き見、「彼らは嘘を言っている」「まさか」

「彼らは卑怯な嘘つきに過ぎない。姫に指先一本触れる度胸などありません。」...以上。言って、皇紀は勝手に立ち去って行った。十人の男たちが息を整えようとする深呼吸の音が、交互に響き、加奈子はソファーにうなだれて顔を上げない。恥ずかしかったからよ。加奈子は言った。決まってんじゃない。「子どもの頃、...ね？」恥ずかしくって、...ねえ、当たり前だよ。「何になりたかった？」どの面下げてって...あいつら、「わたし、意外と」みんな見たんだよ、みんな、「でも、本気じゃなくて、」本当にそう思った。...ねえ、わたしを、「なれたら程度、というか」あいつら、やったんだよ。あんたたち、「でも、本当はね、...」どの面下げて、「...嘘」...って、分かる？「すっごい憧れた」逃げ出したかったよ。...ね？「憧れた職業は...ね、...」泣き叫びそうになった、振るえたもん。「聞く？」まじ、「笑うよ」わたし、...ね？耳打ちされたその職業の名前は聞き取れなかった。麻里子はわざと私に体重をかけて、髪の毛が重なりあうにまかせ、...見て。言った。スカートを少しだけはぐってみせ、厚手の黒いストッキングの太ももの内側を指して、「電線してんの」声を立てて笑う。渋谷の雑踏は、人であふれた。麻里子が私を愛していたことは知っていた。明け方目覚めて、苦痛にうめきながら私に強姦された皇紀は立ち上がって、川沿いの土手を歩いた。「やあだって感じ」鼻で笑って麻里子はストッキングの小さな穴に爪の先を突っ込み、むしろ広げて、全裸の、泥と血にまみれた女がふらつきながら歩くのを、通りがる全ての人々は目に留めたが、寧ろ咎めるような眼差しが女に向けられた。「指、入るかな？」笑って言う麻里子の髪の毛の匂いと、その体臭を気付かれぬように嗅いで、人々は女を見たが、何も関わろうとはしなかった。気付かれたに違いなかった。麻里子には、大丈夫？声をかけそうになった男が独り語散るようにつまみ音は彼の口元で鳴っただけだった。何もかも、ばれているに違いない、と、麻里子には。そう思い間ながら、その当時女が借りていた日野市のマンションまで女は自分で帰った。その思いが事実であることを、駅前を通り過ぎ、交差点を横切る。私は願ってさえいた。全て、通報された警官が、困るんですよ、そんな格好、言って、全て麻里子は気付いているのだ、と、女は警官を無視してマンションを上った。私の気持ちにも、言いだせない、私の、警官はマンションのエントランスに待機して、誰かと連絡

を取った。真意、私の気持ちのその、部屋の中に入った皇紀は部屋に倒れこみ、全てを、麻里子は知っている、ふたたび意識を遠のかせながら皇紀は、そうに違いない、と、自分で救急車を呼んだ。「戦争しなくなったら、人間は終り」と汪が言ったとき、私たちは桜桃会の合宿の視察に出かけていて、なぜ、汪が私などに興味を持ったのかわからなかった。「薫さんと一緒に、いっぱい、殺したけど、本当に、」独立を進め、金を用意し、「銃を向けて、殺すんだよ、」...ね？彼は私を金で買ったのだが、建築に対して「分かる？やったことないでしょう？いま、」なんの興味ももっていない汪にとっては、「日本人は。」必ずしも有益な事業とはいえない新規分野に手を出す必要などもとからなかった。「戦争って、人間の仕事。人間らしい仕事。人間以外には」日差しの向こうで桜桃会の外国人たちは「できないよ。人間以外には、」でたらめな「しない。...でしょう？」彼らの軍服を着て「だって、...ね、いつも考えるよね。」匍匐前進する。「犬も猫も子ども、生みます。でも、」高尾山の山の中の斜面を「戦争するのは...」飛べない蛙のように這う。「違う？そうだよ」彼らは結局、と「...ね、人間だけ。生きるために戦争なんかしないよ。」私は言って、なんで桜桃会なんか「戦争しなくても食べるよ。」参加したんですか？実際、「いっぱい食べました。」外国人なんでしょう？笑った汪が「食べれば死なないよ。食べないからするのは一揆だよ。革命だよ。」知らない。けど、彼らは「残酷だね、本当に」好きだよ。あれを「一揆はただの貧乏人の僻みね。食べないからね、」やるのが。訓練、鍛錬、...ね？「まあ、ね、食べもしないのに戦争なんかできないよ。あなた、」ぼくは何も言わない。あのこたちが「...ね？食べる奴等が理由つけて始めるのが戦争よ。」自分で考えてやるよ。加賀恭一と言う名の「いいよ。」自衛隊の下士官が「しなさい、できるなら。」皇紀たちを指導した。背の高い彼の「面白いよ。こんな毎日なんてつまらないよ。薫さんと...」甲高い声は、一度聞いたら「...戦争できるなら、なんでもしなさい」忘れようのないある奇妙な「私も、ね、薫さんと一緒にベトナム人いっぱい殺したけど、」女性的なわめき声に似て、彼らを「戦争だったら、何でも」鼓舞し、彼らは「ね？なんでベトナム戦争に負けたと思う？」土と泥にまみれた。「駄目。」いいひと、よ？「どう？アメリカ人、」汪が言った。加賀先生ね、「駄目に決まってるよ」とてもいい人、やっぱり「戦争なんかしてなかったから。韓国人と私たちだけだったら、ベトナム、」専門家だからね、ちゃんと「カンボジア、あそこも、ね、...全部...」訓練してる人だから。日本人「広いよ、世界は。まだまだ、世界は」まじめだしね、「全部わたしたちのものになったよ。」きびしいけど、やさしい「広いよ、とても、」...好きよ、ね？「本当に、でも」みんなね、「薫さんかわいそうだったよ。75年にね、」尊敬してるからね、言うことが「できるんだよ、まだ、戦争なんか、」すぐく役に立つ。もったいない。「もう戦争なんかなくなって、どこにもなくなってね。あとは」本当にもったいない。「戦争なんかいくらでもできるのに、どこでも、」あんな兵隊、アメリカなんか「でも、待ってる。終わるの、」いないよ、「待ってるだけなの。誰も戦争なんかしてない。」どこにも、中国にも「薫さん、見捨てたね」朝鮮にも、見てごらん、「アメリカもベトナムも見捨てたよ。」北朝鮮なんか。あんな貧乏人の家畜に戦争なんか「パイロットよ。爆弾。いっぱい落とすよ」できないよ「...どう？」紹介された加賀恭一は極端に礼儀正しい軍隊風の挨拶をくれる。身のこなしも何も、角ばらなければ気がすまないきびきびとした恭一を、私は軍人のカリカチュアのように眺め、笑んだ私の眼差しを「どうしました？」恭一が言ったとき、彼はまだ三十代にもなってはいなかった。





...でもね、と、やがて汪は耳打ちする。駄目、まだ。人、殺したことないから。恭一の指示を出す声は空間に響いて、もとのボーイソプラノのような声は、誰かがいつか彼の喉を壊してしまったからだろうか？日に灼けた、樹木を粗く掘ったような顔と、その声の間との違和感を埋め難く「裏切り者ですよ、わたしは」恭一は笑う。「自衛隊を裏切っています。」歯をかみ合わせるような彼のしゃべり方が、「だって、」耳に残る。「反政府ゲリラですから」汪は声を立てて笑って、「いまは、ね。いまは、まだ、そう」いえ、いえいえ、いえ、...ね？恭一の交互に「いや、それでいいんです」私と汪を見る快活な「志があるやつは、みんな最初は反政府ゲリラです。」眼差しが、そして「明治維新だってそうでしょう？」皇紀は彼の傍らに起立していた。それはよく知らない、「...ね？」汪は、加賀先生は私の歴史の先生。いっぱい話すよ、二人で、と、「見てる？」

「何を？」

「おしり。...わたしの、」...ね? 「お尻の穴」言う、加奈子は私の顔に彼女の尻を押し付けて、
なんで? 言った。「好きなの?」

「なにが?」

「私の。」

「嫌いだよ」

「穢くない?」

「馬鹿?」

「なんで、そんなに」...さ、...ね? 「好きなの?」加奈子の下腹部が、またがった私の顔の上で
息遣って、見上げられた加奈子の身体の曲線は見苦しいでたらめな肉の塊りに過ぎない。処理さ
れていない陰毛が唇の上に触れ、それらはさまざまな味覚を唇に残す。うつくしいと、盛んに日
本人に称揚されながら、色気も何もない日本の、高尾山の山の樹木が匂いを立てる。樹木の、
葉の。吐き出された酸素の。或いは腐った落ち葉の腐敗した香気を。初めて会った皇紀は、すぐ
に彼=彼女が、少なくともその身体においては明らかに女であることを、誰にでも気付かせてし
まうに違いなかった。桜桃会の制服になっていた軍服に身を包んで、私にお茶を入れてくれた
とき、あなたは、と、見上げた私が言いかけたのを、ただ、皇紀は微笑だけで返し、軍帽がよく
似合った。日野市の桜桃会道場の事務所の中だった。目の前に汪の笑い顔があった。「かっこい
いでしょう?」汪は言った。「美青年、だね」何歳? 言った私に、「二十歳。」答えたのは汪だ
ったが、多摩川河川敷の花火を見る。「彼女は、女性ですよ?」言った私に汪は、「大津寄
さん?」答えて、一瞬の沈黙の後に笑い、「どう? 素晴らしいでしょう?」わたしと加奈子は汪
の後について土手を歩く。皇紀が、なのか、花火が、なのか。左の背後に花火の光が明滅して、
その音響はいつでも耳の近くに鳴る。ああいう格好するのが好きなんですよ。加奈子は言って、
「...変態だから。」私の耳に唇を重ねた。「すき? ああいうの?」

「なにが?」



「あたまのおかしな変態」皇紀は汪が子どもの頃から引き取って育てているのだと言った。加奈

子が十二歳くらいの頃に、いきなり妹だと由紀乃に紹介された。まともに言葉もしゃべれない幼児に過ぎなかった。男装癖が始まったのは高校を辞めてからだった。制服と言う縛りがなくなった瞬間に皇紀の言動は男性化した。汪はむしろそれを喜んだ。冗談に私の後継者、と言って笑わせ、それらの笑顔には、汪から後継すべきなにも汪は残していないことへの揶揄も含まれていた。汪はただそこにいるだけの無意味な王様だった。なにか特異な能力を魅せることもなく、何かに長けているわけでもなく、何かを作りだしたわけでもない。作り、こなし、生み出し、膨らませるのはいつも誰かで、汪が実際に手に触れたものなど何一つなかった。「知らないよ」と加奈子は、あいつのことなんか、何も知らない、言って、問いかけた私の「嫌いだった？」その声には、じゃなくて、と、「そういうの以前。どこの十八歳の女の子が六歳くらいの女の子と朝から晩までべたべたあだこうだっておしゃべりするの？」分かるでしょ、言われた私は、なんか、「...ね？」すっごい、他人同士。よくわかった。彼女の言うことに矛盾もなければ無理もなかった。

軍服を着ていても何を着ていても女は女に違いなく、その男装が必ずしも成功しているとは言えなかったが、恭一が何も彼女のその点に触れないことが不思議だと、思った瞬間に、自分も皇紀にそれをは触れ獲なかったことに思いつく。皇紀は明らかにその身体能力において、他の会員たちに劣っていた。相対的な優劣と言うよりは、眼を背けたくなるほどの明らかな劣等性にほかならず、いつの間にか、いずれにせよ、皇紀は彼らにとって特別な存在でありはじめ、あるいは、もともと、彼らとは差異する存在だった。「いつから、はじめたんですか？」初めて桜桃会の道場に連れて行かれたときに、私は「桜桃会？」一列に並んだ目の前の軍服を着た外国人の整列に、順に目線を流し乍ら「二十年前、かな。」もうちょっと前、...か、と、独り語散る汪は一番端の独りだけ際だって背の低い、皇紀を指した。「彼が、今のリーダー。副主将です。」それが皇紀だったが、正面を向いたまま眼を逸らさない彼の、正面に移動した私たちをさえ、皇紀は視線の中には入れようとしなかった。急激な窪地が作った斜面に遮られた向こうとこちらに樹木がある。樹木に通されたワイヤーを、こちらから向こうまで渡るように、恭一は会員たちに指示した。恭一の見本を小一時間ほど練習したあと、始まった実技は、会員の誰にとってもリスクの高い実技だった。桜桃会の会則において、いかなる失敗も失敗が失敗である以上失敗にすぎないのであって、訓練と言う概念を認めない桜桃会は、訓練中の失敗においても制裁を課した。命がけでするものです、と、池田彰浩と言う名の別の自衛官は、それに寧ろ同意した。軍隊が負けるということは国が減びるということです。「いいですか？」と、たとえ、皆殺しされたとしても、英霊どころか怨霊に成っても戦争をつげなきゃならん。「ですから、...ね、」彰浩の、その、芋虫に生まれ変わっても敵をうたなきゃならん。踏み潰されても、千回、万回、短髪が汗をかいていた。生まれ変わり続けて、たとえ靴底にでも咬みつかなきゃならん。夏の日差しが直射した。それが、軍隊だからね。会員は必死だった。制裁が怖いばかりだとは思えなかった。自分のプライドが地に墮され、穢されるもを、誰もが明らかに恐れていた。初めての演習で、絡み付けた足の、或いはつかみ出した手の一瞬の迷いや不用意さが彼らの身体をワイヤー上にひっくり返して、そこから更に正位に戻るためにもがかなければならぬ。百メートル近くの距離をわたる中に、さまざまな苦闘があつて、それらのすべては残酷なほどに隊員各自の性格と精神状態を曝してもいた。皇紀以外の誰も、完全な失敗をはしなかった。皇紀にその能力がないのは、最初から明らかだった。正面を向くことさえできず、ワイヤー上をぐるぐると回るってばかりで、前に一手つかみ出そうとした瞬間に崩されたバランスが彼女の自由を一瞬にして奪い、ワイヤーにしがみつくなか脆弱さを、周囲の誰もに曝さしめる。三メートルもわたらないそこでぐるぐる回り、息を切らし、しかし、誰も笑い声さえ立てない。会員は全員が起立してその演習を見学しているので、曝し者になった皇紀の醜態を和らげ獲る要素など一切ない。沈黙した人々の汗ばんだ体臭と、皇紀の荒れて不整な息遣いが、山の中の音響の中に木魂す。汪はそれでも、独りで微笑みながら彼らを見ていた。恭一と会員の成長について交わされるありきたりな寸評を耳に入れながら、午後の光にそまる深谷の、目の前の光景は、残酷な見世物のようにはか思えない。二十分近くの時間が経過する。午後の日差しは直視している。汗だらけの身体が、そして汗は、最早、流れ出し獲る全てのところから流れ出して、濡れて垂れ下がった髪の毛が何かの汚物のようにしか見えない。眼差しは進行方向だけを捉え、その内面をは伝えない。皇紀は前に進もうとしていた。だが、それがどうしても不可能だった。その現実の中で、馬鹿正直にもがき続けていた。目の前の光景のすべてが、やがてばかばかしく思え始めたとき、会員の独りが息を飲んだ声が聞こえた。振り向き見ると、皇紀は命綱にぶら下がって、谷間の空中で仰向けに天を仰ぎ、脱力した四肢はただ、粗く震えていた。筋肉が痙攣を起こしたのかもしれない。命綱がぐるぐる回す皇紀の、ただ正面をだけ向いた表情が、明らかな敗北と、明らかな屈辱の表情にゆがんでいた。目の前ですべてを失って仕舞った人間の、すでに気付いていた全喪失の現実へのふたたびの驚愕に改めて我を忘れた、そんな表情が、私は、そして凄惨なその汗だらけの顔から目をそらした。「頼む」と、引き摺り降ろされた皇紀は言った。任せる、と、もはや、その手の平に、自分の命綱を解く余力さえ残っては居なかった。躊躇する会員たちの表情は闇雲にお互いを見詰めあい「やってくれ、頼む」とふたたび言った皇紀は上着を脱いで、さらしを巻いた上半身を曝す。頭の上で腕を組み、眼をとじる。何をとも見詰めない見開かれた眼差しが、会員たちを有無

を言わせないままに強制した。行きます、と言ったフィリピン人の木刀が、にもかかわらず一瞬躊躇したあとで皇紀の腹を殴り、その渾身の一振りが、くの字に曲がった皇紀の体ごと地面になぎ倒す。うずくまったまま、体を震わし、地に唾を吐き、もう一度姿勢を整えると、すぐさま木刀は腹部を打ちのめす。うめき声は立たない。つめられた息の、切れ切れの间歇的なノイズが、空間を穢す。三十回、それは繰り返された。カンボジア人との混血なのよ、と加奈子は耳打ちした。皇紀って、...と言って、だから、違うでしょ。体臭が、さ。...ね？「なにが？」



「ちょっと、生臭いの、嗅いでみ。近くで。首筋とか。変な匂いするから。」笑って、そう言った加奈子に誇張があることは確かだった。人種、違うから、言って笑って、加奈子に屈託はみじんもない。汪がかわいくなってた女が現地で作った混血。ポランティアかなんかだったらしいよ。だまされたんじゃない、どうせ、と、その後父親のカンボジア人は汪に日本で使われていた、と、そう加奈子は言った。「カンボジア戦争の頃、ポート・ピープルっていたでしょ？...知らない？世代的に知ってるんじゃない？そういうのと知り合ったカメラマンがいて、そいつと一緒にいた女の売れない作家かなんかとの間にできた子ども。」数回の殴打で倒れた皇紀は身を起こそうとして立ち上がれずに、会員たちが無理やり立ち上がらせる。傷めた腹部は皇紀が直立しようとするのを妨げて、体は斜めに曲がる。その曲がった身体を再び、木刀が打ちのめす。すべてが終わったとき、力尽きた皇紀は土に顔を埋めるようにして左手だけで草をつかんでいた。右手は何もしないで、へし折れたように投げ出され、突き出された尻が、皇紀が慎重に、深くゆっくりと息遣うたびに、遅れてかすかに痙攣する。なにか、ほどけてしまいそうな連結を、皇紀の身体が必死につなぎとめようとしているように見えた。立ち上がれない皇紀をそのままに、訓練は続行され、皇紀の口が泥をかみながら息を吐く。樹木が連なって、夥しい葉々の群れの切れた先に青空が広がり、いいね、と言った汪は私に微笑みかけた。「いいよ、ああいうのはいい。」なにが？と、問いかける必要もなく、「屈辱って、いい。人間を育てるよ。」笑った汪の私を見詰めた眼差しの上に、汪は皇紀をだけ見ているには違いなかった。やがて道場に寝かされた皇紀は仰向けに、そして彼女は天井を見詰めながら、夕方の日差しが道場の中を照らす。私は皇紀を呼びにきたのだった。道場の戸を開いて、そばに行き、傍らに胡坐をくむと、いまだ汗を洗い流しても居ない皇紀のいやに甘ったるい体臭が匂った。ずっと皇紀は眼を開けていた。大丈夫ですか？言った私に、寧ろ皇紀は目を閉じて、恥ずかしいところを、お見せしました。自分がこうなることは、皇紀は最初から知っていたに違いなかった。会員の誰もがそれを知っていた。何度も皇紀は失敗し、制裁を受けてきたはずだった。皇紀を殴打する彼らの振る舞いには、慣れが見ら

れた。道場の正面の真真中に飾られた遺影があった。明らかに日本人以外の、古い世代の男だった。誰ですか？「薫さん、と言います。ベトナム人。ベトナム名を、そのまま漢字にしてください。桜桃会の創始者です。」

「なくなられた？」

「戦争で」

「戦争？」ある意味で戦争、と、皇紀は言ったが、社長が殺したんですよ、とその言葉は私に聞かれながら、なぜ、あんなこと、するんですか？「なにを？」

「無茶でしょう？」鼻にかかった笑い声を立てた瞬間に、皇紀は顔をしかめた。腹部の痛んだ筋肉が皇紀にただ、なかなか沈静しない痛みの鈍い波をだけ立てる。「女の癖に、って？」言った皇紀に、あなたは、じゃ、女なんですか？「ええ。」まだ泥の色彩さえ付着させていた、小作りの唇が発される言葉に合わせてかたちを崩すが、正面のコンクリート壁に日差しは照射した。「私はつまらない人間ですよ。普通の...奈美、会いましたか？」

「あなたの、」

「私のカノジョ、ですね。彼女のほうが倒錯してる。単に女なのに、女の私を愛してるから」

「でも、あなたが、」

「...誘惑した？」奈美には事務所であったことがあった。地味な格好をした、日本の工場かどこかで働いている貧しい中国人の女たちのような、彼女にはそんな、けなげでも薄穢れたような気配があったが、いやな感じはしなかった。「奈美が自分で誘惑させたんです」どうぞ...お茶を、と「どんな、関係なんですか？」事務所奈美は言って「望んだことを与えてる。彼女に。哀れんでるのかも知れない。不幸ではないけれど、幸せとはいえないから。」私に微笑みかけた。そのあとで「じゃ、あなたは？」

「幸せになりたいとは思ってますよ、」皇紀にじゃれつくような仕草を見せて「普通に。」皇紀はそれを無視し、かつ、奈美の媚態を許した。「桜桃会はその人が作ったんです。源薫さん。ベトナム名は忘れましたが。知的な人でしたよ。小さい頃に会いました。茶道も生花も、もともとは彼から教わりましたから。」

「うわさは聞きましたが、」

「おかしいの...わらっちゃう、」と、皇紀は息をひそめ、私は皇紀が女性言葉を使うたびに、なぜか、禁忌に触れた痛ましさを感じていた。「いつも、ベトナムに帰りかかっているの。ほんとの、」いつも、と。で、言って、で？

「...で、」そして、一瞬の沈黙の後に「かわいがってくれましたよ。いつも。加奈子さんも。私も。」...ね、「まるで娘みたいに。姉妹みたいに、かわいがってくれた。」初めて男を抱いたのは東京に出てきてからだった。高校までの閉塞的で、あまりにも接近しすぎた関係の密集のなかでは、私にはその自由は与えられなかった。誰もがそれを知っていたが、私が誰を愛しているのかを禁忌のように聞こえたくない無視の中で、それでも彼らは私の性向を彼らなりに尊重しているように見えた。それは慶介ではなかった。クラブのイベントでDJをしていた西村家納と会った瞬間に、彼がゲイだと言うことに気付いたが、それはすでに誰もが知っていた。受け入れられることのそのあまりのた易さに戸惑いさえし乍ら、私は確実に、それまでの環境の中で家畜にされていたに過ぎないことに気付いた。あるいは、自分で自分を家畜にしていたのかも知れなかった。いまさら学校教育への憎悪など生まれえない。寧ろ、家畜に過ぎない家畜だった自分へのいたが、出して、と言った加奈子の声を耳元に聞く。耳元に触れられる寸前まで近付けられた唇が、そして上に乗った彼女の身体がすでに私の体中に押し付けられていたことに気付く。お互いに腰を動かし乍ら、それは一致し、一致し外れ、あてがって、一致し、探り合って、相変わらずの微妙な不一致を、そして楽しむ。接着した皮膚の面が汗をにじませて、お互いが相手の皮膚だけが汗ばんでいるのを感じる。背筋を這った指先は加奈子の背に中のくぼみににじんだ汗を確認したが、「射精しちゃいなよ」...ね？

まだだよ、と、「なんで？」...ねえ、

え？「よくないもん」おまえの、...ね、「よくないもん、」ぜんぜん？

まったく。

なんにも？

完璧に。「いかせてみせろよ」言う声を加奈子は聞くが鼻で笑って、妊娠させてみなよ、何回も、と、「あんただけじゃん、...ね、もう、結構、やってんのに」ね？「まだ一回もあんたの、妊娠させられてない」

「分かるの？」



「わかんないけど、知ってる」たまには、と、「どうせ、」妊娠させなよ「墮ろすんだろ？、また」たまには、わたし、「...ね？」何歳？「三十六」もう、結構、きたね、と加奈子が声を立てて笑ったとき、終わった行為の白い残骸を、加奈子は仰向けに股を開いて、指先にいじってみせ乍ら、「名前付けてよ」

「してないよ、妊娠なんか」

「わかんないよ」

「なんで？生むの？」

「生んでほしい？」

「やだ」

「じゃ、聞くな」墮ろすよ、「...ね、」もちろん。じゃ、「気持ちいいの？」なんで、名前いる？「なにが？」...え？いいじゃん。「いったとき、わたしのさ」つけたげなよ、「中で」あんたの「別に。寧ろ、まったく」子どもじゃん、「関係ないよ」名前くらい。「なんで？でも、」...で、「やりたいんでしょ？」ちゃんと「それさ、」墮ろしたげるから、「気持ちいいからじゃないの？」...さ。名前、つけてよ。

「...加奈子。」私が言ったとき、...最低、言いながら加奈子は笑い出し、笑い崩れ、「奈美が、手首、切りました」指先の体液を「大丈夫？」私の鼻の先に「いや、ただの、愛情表現でしょ？」皇紀は退屈そうにコーヒーをかき混ぜたが、「全然気持ちよくない」大丈夫ですか？...え。顔を上げて「まじ？」皇紀は「入れた瞬間だけ」奈美は...、いや。「男は？」違って、その、大津寄くん、大丈夫？「男はそんなもん」じゃ、なくて、「男に入れたときは？」笑った皇紀は「一緒。てか、」ぜんぜん。「なんか、ぶよって」まったく、「ぶよってしてんの」...支えますよ。

皇紀は言った。「僕はね。彼女を。」

「めんどくさいけどね、...でも、カノジョだから。」いろいろあったんでしょ、彼女にも、と、風俗嬢は駄目、と、慶介は言った、あれは、「くすり系に手を出してないだけ、」社会のクズ。笑い、俺もだけど、「まだマシじゃないですか？」けど、まあ、「経験あるんですか？」一緒だね。ホストも風俗嬢も。「わたし？」...くどいからね。うざいし。「わたしが？」と言った皇紀の言葉が、女言葉を使って見せたのか、単なる日本語のなのか、「...覚醒剤とか？」一瞬の判断の迷いに衝突した気がし、「前の、カノジョです」

「分かれたの？」

「自殺したんですよ」皇紀は声を立てて笑い、わたしたちの話が隣の席の学生らしい二人の女に聞き耳を立てられているのには2人とも気づいていたが、「僕の名前、呼びながら飛び降りたんです。大学生の頃。なんか、大学の構内に来ちゃって。モデルでしたけどね。雑誌の。女の子

のね。渡り廊下で目が合って、あれ?...って、いきなり窓から飛び出してきて、そのまま踏み外して墮ちた。事故死と言うか、自殺と言うか。」

「どう思ってますか？」...どうって、と、肩をすくめた皇紀が、仕方ないでしょ、その言葉を言いかけたときに、「じゃなくて、」私は自分の言葉の意味を気付いた。「僕に、されたでしょ？」...ああ、皇紀は独り語散るような何か言おうとし、そして、何も言わない「どう思っていますか？」

「憎んでいるとか、何だとか、ですか？」

「卑怯だとか、愚劣だとか、何だとか」いや、...ね。じゃ、と、皇紀は、「逆に何で、もう一回しないんですか？」あなたを？「もう、わかったでしょ？」もう一回？「何しても騒ぎ立てないって。楽な女でしょ。やりたくなったら、殴って、蹴って、やっちゃえばいいんです」カフェの中の物音の連なりと連鎖を聞く。「なんでやらないの？ホモだから？」

「いやじゃないの？」

...うー.....ん、と、...ね。...「許しはしますね」実際、許しちゃった。言った。けど...、言ってみて、「奈美は激怒してましたけどね、殺すって、柎也さんのこと、殺すって、」病室の中で付き添っていた奈美は、病室に入ってきた私を認めると、ありがとうございます、駆け寄って頭を下げ、わざわざ、と、その一瞬涙ぐんだ奈美は、恋人の突然の暴力的な状況を受け入れ難く、傷ついた皇紀に、寧ろ絶望的な思いに駆られながら、だいじょうぶ、だいじょうぶだから、それだけをことあるごとに繰り返す。「誰にも言わなかったけどね、奈美だけには言ったから。喉、やられちゃって、声出なかったから、彼女のおなかに指で書きましたよ。」ごめんなさい、皇紀は言った。ばらしちゃって、でも、「...ね、疑ってたんで。彼女。社長がやったんじゃないかって。」綺麗でしたか？ややあって、不意に言い出した皇紀に、聞きなおす隙さえ与えずに、「綺麗でしたか？」言い迷う私に、イエスカノーかで答えたら？

イエスだ、と私は言った。声を立てて笑い、皇紀は、「知ってる」言う。...知ってますか？「そういうば、」と、皇紀はスマホを出しながら、「加奈子さんや、わたしや、瑞希さんや、要するに取り巻きたちと、社長との関係。」ちょっと、過激だけどね、と、息をひそめた皇紀は音の消された動画ファイルを再生して見せ、おかしくて仕方がないように、いたずらな笑みはその眼差しに浮かぶ。動画の中で、裸になった汪の上で扶美香が腰を動かしていた。汪は両手足を広げて、むしろ無抵抗な下僕のように見えた。隣に、裸の瑞希が煙草を吸い乍ら、そして初めて瑞希が煙草を吸うことを知った。加奈子はベッドの端にうな垂れて、腕でそれぞれに局部を隠し、怯えたような眼差しでカメラのほうをときに見た。撮影しているのは皇紀だった。いきなり振り向けられたカメラが至近距離で皇紀の顔を捕らえ、近付けられすぎたカメラの距離が斑な鬩りで神経質にその顔全体を汚し乍ら、笑い続ける皇紀が何か口走り、向こうの誰かに声をかけ、不意に、カメラに投げキッスをくれる。「加奈子さん、一番、奥手なの」ずっと、ね、いちばん甘えたいくせに、ずっと、いじけてんの。「めんどくさいんだよ、あの子」言って笑う皇紀に、私は笑いかけて、「たぶん、社長のこと、一番、普通に好きなんだと思う」声を立てて笑う私に指を立てて、しい、と言う。「ぞくぞくした」なにが？「合宿で、制裁されたでしょ、わたし。」...ね？近付けた唇が、耳に噛み付きそうな「あれ、...ね？」予感を一瞬、すぐに、皇紀の笑い声にすべては崩れ去る。「もっとも私のことをぐちゃぐちゃに壊した犯罪者が見てるの。その目の前で、もう一回ぐちゃぐちゃにされるの。」ひところしたことがあるでしょ？ひそめられた声があった。「ないよ」うそ。...でも、そのうち、誰か、しっちゃえば。笑った息が耳元にかかり、隣の女に着信があった。たぶんね、そのうち、だれか「本物の男になれるよ」殺しちゃう、言った。「だって、そういうタイプじゃないの？」笑うわたしには眼もくれないくせに、皇紀は何度かうなずいて、...社長とか？言った。「汪社長とか。...」繰り返し、そして笑い、...あ。その皇紀の声に振り向いたとき、私は、ややあって、皇紀がなかば口をやわらかくあけて、そのまま静止した一瞬、皇紀はわたしを見つめていた。そういうば、誤解してるかも知れない。「なにを？」私に、皇紀は媚びるような笑みを作って、「どう言ってほしかったんですか？あなたが、その、あの時の事を聞いたとき」

「あの、あなたを、」

「そう、強姦しとき。」声を立てて独りで笑い「ぐちゃぐちゃにした時、ね。あなたが犯罪者になったとき、どう言ってほしかった？」

「あなたに？」

「憎んでほしかった？愛してほしかった？...例えば、どっちですか？」浮かんでは消えて行くいたずらな媚の群れが、それでも曖昧な性別を獲得する寸前に、すばやく連鎖し続け、結局は私は皇紀の表情をは捉えきれない。「知ってますか？」...ね、と、「気付かなかった？」何も言わない私に、そっか、と、一瞬うつむいた口元で独り語散った皇紀は、「そんなもんかな、あんなだと」なにが？「初めての男なんですけど。」わかりました？言った皇紀の眼差しに、私は目をそらして、汪は、知らないかも知れないけど、もう昔から役に立たなくなっちゃってるので、...「いつ？」言った私に、皇紀は一瞬の茫然とした無表情を曝して、なに？「汪社長とあんなふうになったのは、例えば、あなたは何歳のときなんですか？」

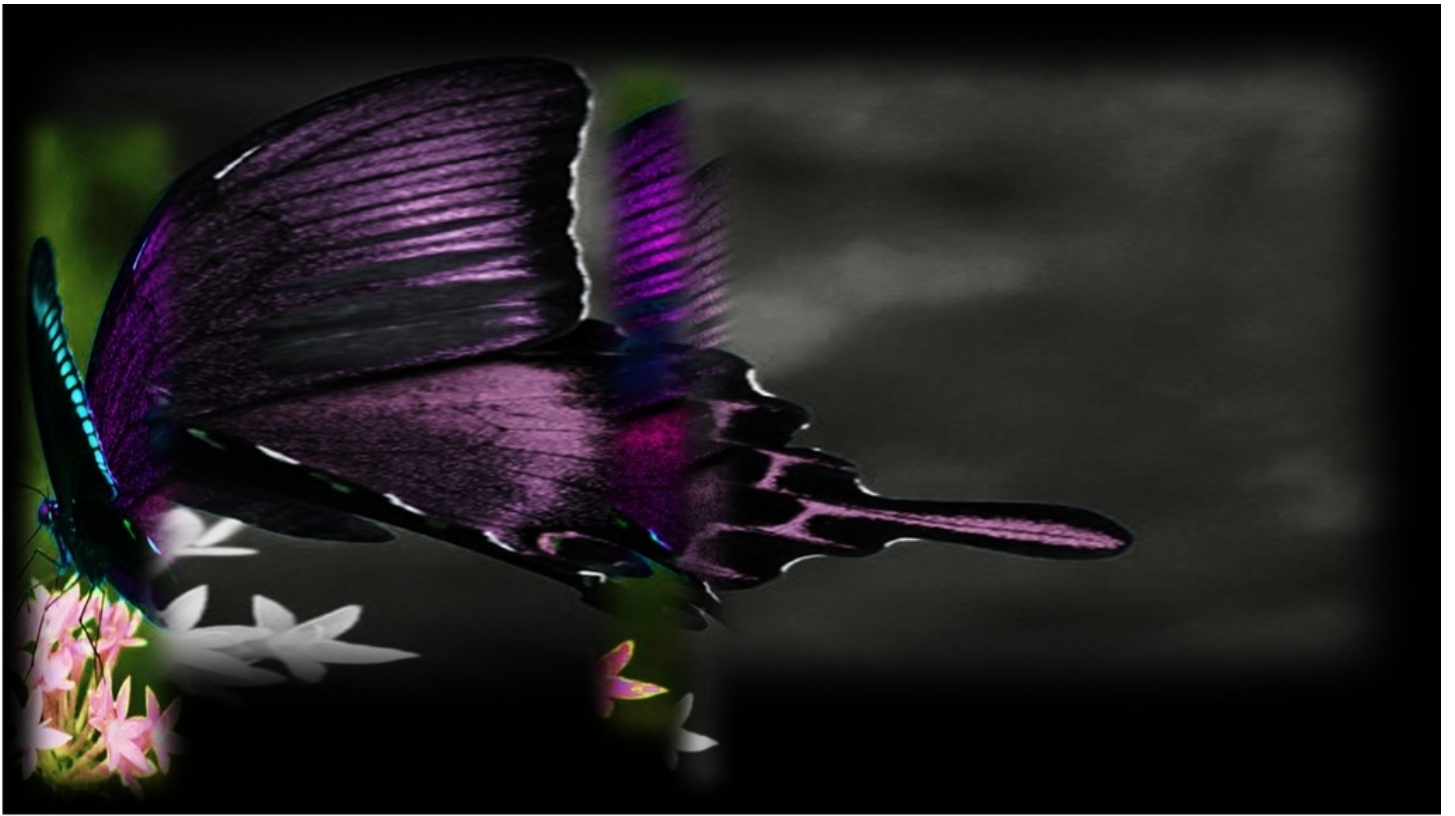
「十二、とか？加奈子さんとか、由紀乃さんとか、お姉さんたちがそうだったら、真似するでしょ。でも、最初の最初から不能のはずですよ。社長は」

「最初？」

「戦争の後遺症とか、そういうことじゃないですか？義眼だし、片足だし、あれで、相当ひどい眼にあってますよ、たぶん。だから余計戦争信者なんじゃない？いまでも怯えてるのかもね。...覚醒剤はやってないけど、マリファナは毎日、...ね。」噴出して笑い、ガンジャ、ね、卑怯だよ。...なんか。「でしよう？」だって、だって、さ。...ね？シャブ売りまくってる当人が、一人だけガンジャだよ？

二十五歳くらいの頃、初めて汪に会ったとき、汪は慶介のためにシャンパンを空けていた。歌舞伎町のホストクラブの役つきだった慶介に、汪は寧ろ媚びるように接待し、慶介もその接待に応じて、彼の前で、わざとわがままな王様のように振舞った。私は汪が私たちと同じような人種に違いないと思っていたが、それが勘違いだったのかどうか、結局最後まで分からなかった。はべらして連れ歩いていた、まだけばけばしいほどに美しかった由紀乃も、彼女にも恋愛感情をいだいているようには思えなかった。由紀乃に関してもそうだった。由紀乃は彼に尽くしたが、そこにはいつも、過剰なほどの彼女のナルシズムが感じられた。いつか、と、慶介は酔っ払って私に、「あいつの肛門に、ドンペリ、突き刺してやろうと思って」耳打ちした慶介は、汪を四つんばいにして追廻し、汪がわざと派手な声を立てて逃げ回った。バブルが弾けた歌舞伎町で、やくざたちや、中国人マフィアたちはまさに生き生きと活動していた。そのどちらでもなく、どちらでもある汪は、抜け目なく立ち回って、つかんだ穢れたあぶく銭をあらゆる形で蓄積した。子飼いの女たちに会社を作らせ、金を浄化し、更に小刻みに貯蓄して行った。桜桃会は彼の親衛隊のように見えた。彼らに汪の親衛隊である気がなかったとしても。北朝鮮から銃器を収集し、密売し、道場を作った。汪が死んだと知らされたとき、汪でも死ぬることが驚きだった。加奈子の開かれた唇が、その奥に彼女の口蓋はあけ開かれて、覗かせた歯の白さの純白とはいえない生物的な色彩が、何か言ったあと、...え？、と、それだけただ聞き返した私にはなにも答えないままに。「未来の話をしようよ」

「なんの？」言った私に聞き返すが、加奈子は笑っているだけだった。「誰の？」加奈子の言葉を、そして私は微笑んでさえたのだが、銭金のはなし？子どもの話？革命のはなし？イノベーション、あるいはレヴォリューション、改革、前進、変革、時代が変わるって？...なによ、「...ね？」何の話がしたい？ほら、と加奈子は言った。何もかも朽ちかけてる、と、窓の向こうの荒れたベランダの鉢植えの花の群れを差して、それらは日差しの下で小さい、白と、紫と、ピンク色と、白地に黄色をはべらせたグラデーションと、それら花々を咲かせて、風とさえ呼べないほどのダナン市の微風が揺らめかせるのだが、粗雑な言葉の群れがむき出しのままに飽和している。私のそれをも含めて。日本でも、ベトナムでも。立ち寄ったカフェの中でも、部屋の中でも、沈黙のときにも、交配の間さえも、窓の向こうにさえ、こっちの内側にさえ、カーテンでさえも、結局は昼間の日差しを防ぎ切れはしないように、おぼろげにはあっても飽和しきった言葉の群れに飽和させられる。加奈子がベッドの上で股を広げたまま、自分の腹部に指を這わせ、乳房をつかんで、不意に目が合った瞬間に、乳首を二本の指先でつかんで、はじき、勃起しかかかったその褐色の点が、いや。と、それだけ言った加奈子が、「未来の話なんかいや」「なんで？」聞かないで。その、拒絶がすぐに笑みに紛れるのは、「老いぼれていく先の話でしょ？」老いさらばえた、と、加奈子は言いかけるのだが、言いよどんで、自分自身に対する劣等感を伴った愛撫の内に、その指先が自分の体を確認する。「きれいだよ」「うそ！未来なんか、「うそじゃないよ」見なくていいから。だから、...さ、「綺麗だよ」目を閉じて、「...ね？」乳繰り合っていない？ずっと。「もっと言って。その、」何でもいから。「むかつく嘘」もっと言って、と、ひざまづいて、ベッドの上で、彼女の開かれた股に顔をうずめて嗅ぎ取られた匂いの中に、密着された空間の中で、自分の老いさらばえた体臭がした気がした。十二歳の頃にさえ、妹の幼い皮膚にむごたらしいほどに自分の老いさらばえていく現実を知覚して、彼女が広げた巨大なひらがなが羅列された宿題に、彼女の容赦ない知性の欠落に嫌悪する。こんな愚かな生命体でいることはいやだった。耐え難い嫌悪感が、過去の全てを塗りこめながら、未来の老いさらばえた醜悪さにおののく。いくつも眼にした死の穢らしさを思い出すたびに、その、例えば妹の。引き裂かれた肉体の。生きているものが持つどうしようもない醜悪さは、寧ろそこに潜在するものの先験的な倫理だったのだろうか？...死の？そんな矛盾した感性的な論理遊びをもてあそんでみる時間など許されてはいない。舌を触れて、加奈子のそれに触れ、触れた舌の先は、その誰のものと同じでしかない味覚を知覚したとき、加奈子はわざと、日本風の声を立てて、私の頭を手のひらに触れた。「知ってますよ」と、瑞希が言ったのは、強姦された皇紀が病院に収容された日の午後だった。「柿本さんでしょ？」「なに？」とぼけないで、と笑った彼女に、なんで？「なんで、」「知ってるのかって？」微笑みがやがて、耐えられなくなった笑い声になって仕舞うのを、最早瑞希は止めない。「加奈子ねえ、言ってましたよ。」あいつが、と、私の声は彼女に確認さえされない。「知ってます？」なに？「あの二人、兄弟なの」兄弟？「ごめん、姉妹」なにがおかしいの？ね、「お母さんが一緒」なんで笑ってんの？「お父さんは別ですけど。ばかばかしいでしょ」...でも、ね？と、ひそめた声が、聞き取られやすいように接近させられた彼女の唇の、耳たぶへの息が触れる距離の中で、「気にしないで」いやではないがその口臭を嗅ぐ。その「全然、気にすることない」匂い以前の、いわば匂いのかげろうの存在「もう何回も」あの子たち、ね、もう何回も。桜子、何回も強姦されてるから。加奈子が捕まえた男に。「大丈夫、」と瑞希は言って、私の腕を組んでとり、「あの子、何にも言わないから。いつつもそう。」心配しないで。気にしなくていいから。有栖川公園で開かれた茶会の数日後に、私の建築事務所に来た汪はいつものように上機嫌だった。いつでも常に陽気さを装って、よそわれた陽気はすでに彼の本性にさえ化けていた気がしたが、「...ね。」声を立てて汪は笑い、「小手調べ、するよ」「なんの、ですか？」「何、言ってるの」不意に叫んで、不満をわざと曝した汪の表情は、「桜桃革命の、よ。」...殺すよ、言った。本当に。と、じゃあ、と、私は、今まであなたたちが殺してきた人間の死は一体なんだったんですか？「一人一殺。その、実践練習、...ね？」言わなかった私の言葉に、汪が答えるはずもなく、「誰を？」



「尾上たち」言った汪は、奇妙なほどに陽気な笑い声を立てた。加奈子は言ったものだった。汪になんか媚売ったって、どうしようもないよ。だって、「尾上さんを？」もう、あいつ、行き場所ないから。「...そ。...ね。」二十年前の中国だったらともかく、「事務所、襲撃させるよ」いまどき、「桜桃会」中華人民共和国に汪なんかの居場所あるわけないじゃん。「本気よ」しがみついてんのよ。「いつ？」日本に。海の中の孤島だから。「二日後」時代遅れの気違いでも「誰が、」生きていけるから。「誰のアイデア、...」必死なんだよ、「決断ですか？」あれで、と、「恭一さん」お茶会で恭一は尾上のコップに酒を注いでやっていた。僕たちはね、と、恭一は挨拶した私に、「兄弟みたいなもの。お互いに、本当に、命を張ってますから。いつでも、棄てる覚悟ありますから。武闘派って何？...ね？それね、その、覚悟のね、問題。」武闘派です、尾上は笑い乍ら同意して、酒をあおり、花見と変わりはしない。花ではなく、夏の大量の緑葉とその木漏れ日が散乱しているだけだ。計画は桜桃会が立てた。恭一はそれを修正し、指導した。北朝鮮から買った銃器を持たされた会員たちは、八月二十八日、それぞれの自宅で朝六時に目覚める。対象は、尾上組の五人の主要幹部と、住所のあてが着く限りの六人の末端の構成員だった。各自担当する人間を尾行し、夜九時、LINE上に於いて所在確認の上、最終的なオペレーションは恭一が決める。簡単なことだった。どこでも、彼らに連絡できればいいのだから。恭一はその日、自宅近くの飲食店で友人と飲み会をしている最中だった。それはアリバイ作りでもあった。事務所の襲撃には四人の会員が当たり、「なに？...女でもできた？」その他人物はそれぞれの機を見て襲撃する。夜十時の最初の「違いますよ」襲撃は事務所であって「妻子もちじゃないの？」なんの問題もなく襲撃が完了した後「堅物ですよ。私は」最後の吉祥駅近くの「嘘だろ？」自宅における久本裕也射殺に至る深夜一時までには全ては終了した。

十時五分、新宿北新宿尾上組襲撃

宮本大三、北浦泰隆、上原茂史、大津隆一郎、射殺。

担当、フン・サン、ティン・ウィン、李浩宇、ホセ・テルテ、タン・ヌ

十時三十五分、新宿歌舞伎町パブ・クラブ《グランデ》襲撃

白田直人、三浦庸一、日比谷高志、射殺

担当、張浩然、マニー・ペンペンコ、キン・タント

十一時二十分、新宿区大久保

槇井健一、射殺（自宅マンションを襲撃）

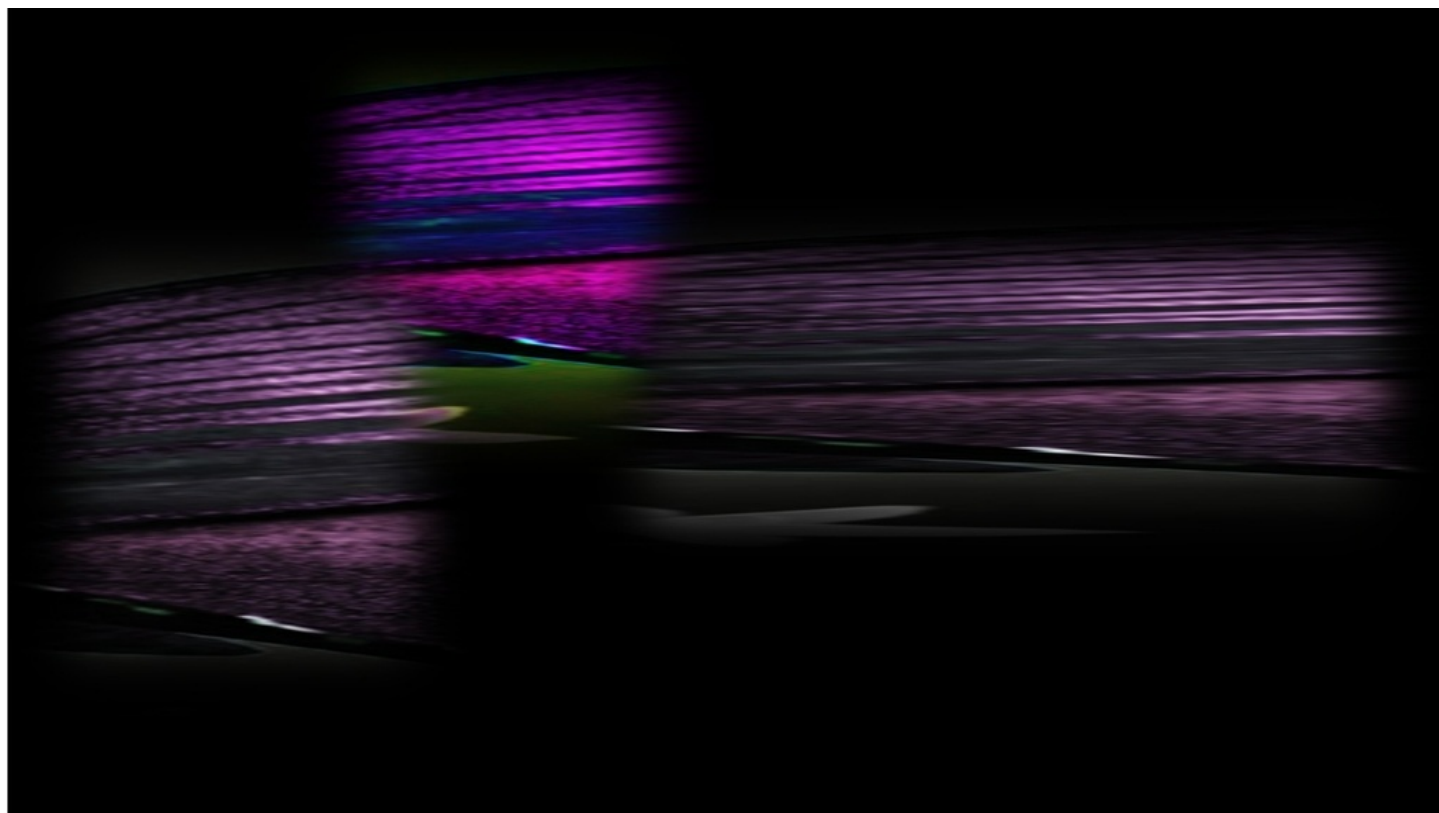
担当、エミリオ・リサル、陳劉翔、

一時十分、渋谷区初台

久本裕也、射殺（自宅マンションを襲撃）

担当、レ・ティ・ニア、ノイ・センダラフォン

尾上だけ、アポイントはすでにとってあった。皇紀の携帯番号でかかってきた電話を、尾上は何かの間違いだと思った。皇紀が女言葉を使ったからだ。皇紀が尾上にそれを使うのは初めてのことだった。話しがあるから二人だけで話したいという皇紀が指定した場所は花園神社の前だった。指定された時間に遅れて着いた尾上は皇紀を探したが、ふと、ややあって、すぐに、目の前にいる女が皇紀であることに気付いた。「どうしたの？珍しいじゃない？」...ね？びっくりした？言った皇紀の声に戸惑いながらも、尾上はそのまま皇紀の先導に従う。入った歌舞伎町の寿司屋で尾上は皇紀の解かれた長い髪の毛と、完璧にメイクされ、香水さえまかれた皇紀と話す。た易い煽動に過ぎない。暗示するだけで、寧ろ尾上は皇紀を口説き始め、何度も言葉を重ね、最早懇願するように、そして、同意した皇紀たちは席を立つ。淡い色彩のキャミソールと、短パンから晒された皇紀の身体が、尾上を駆り立てて、歌舞伎町のホテルに入った皇紀は、すぐに、笑いかけながら服を脱いで言った。「わたし、決めたら、もう迷わないから。」言って、声を立てて笑い、「待って、」...ね？いやなの。「なにが？」臭いよ。わたし。臭いって思われるの、絶対いや。先にシャワーを浴びた皇紀はバスタオルを巻いて、書き上げられた髪の毛が匂いを立てた。「待ってて。」...ん？と、シャワーを浴び始めた尾上が出てこない内に、ポーチから、小さな、砥がれた果物ナイフは枕の下に隠された。バスルームから出てきたとき、皇紀は枕に背を預けて仰向けに、開いた自分の股に指を這わした。「ほしい？」なめて、と、皇紀は言った。「好きなの？」



「好きなの...ね？。ひざまづいて...ね？。犬みたいに...ね？。ぜいぜい息切らしながら、...ね？。むしゃぶりついて...ね？。舐めて、...で、しゃぶって、...で、ぐちゃぐちゃにしてほしい。」白髪交じりの尾上の髪の毛をつかむ...ね？。十二時四十分。大事な話だから、と暗示をこめて皇紀に命じられるままに、尾上の携帯電話は電源が切られていた。自分にしゃぶりついて、舌をつかう尾上の顔を股に挟み、ひっくり返して、あお向けられた尾上顔の上に載った皇紀の豊かな曲線を見る。「見ないで、やだ」恥ずかしいから。「関係ないよ」だめ。尾上の顔に自分のそこを撫ぜつけて、目を閉じられた尾上の顔に、自分の体液をこすりつけてみる。嘔き出

された唐突な皇紀の笑い声に、「なに？」すでに、枕から引き抜かれた果物ナイフが自分の喉を突き刺していたことを、尾上は理解できない突然の苦痛の中に自覚したのだろうか？突き刺したナイフをえぐり、噴出した血を全身に浴びながら、皇紀は自分の手のひらが押さえた尾上の目が左右に震え続けていることには気付いていた。どんな気がした？ふたたび、他人の血にまみれてみることは。いまさら。生まれたときに十分浴びたはずだった。その時に、完全に他人となった母親の流した血を。いまさら、ふたたび。よくやった、と、翌日の打ち上げで言った恭一に、整列した皇紀たちは一礼した。桜桃会側の犠牲者はなかった。数人のかすり傷と軽度の打撲くらいのものであった。「...ねえ」加奈子が耳打ちした。「他人のふり、してる？」なに？恭一は訓示をたれ、振り向いた眼差しの中で、加奈子は微笑みながら、「ずっと、他人の振りしてない？枉也？」

「他人って？」

「あんたも共犯だよ」だって、と、知ってたのに、何にもしなかったでしょ？あんたも。

あんただって、結構、仲良かったじゃない。ややあって、加奈子は言った。...尾上と、さ。「知ってるよ。わたし」...てか、さ。私は言った。どうせ、社会のクズだろ。と、そして加奈子は笑う。「じゃ、やくざはアウシュビッツに連れてってでもいいのか...」その声は、わざと独り語散るように「人体実験してもいいのか...」実際、ある意味、人体実験でしょ。これは。練習だって言ってたんだから。「...じゃない？」学校で教わらなかった？加奈子は言って、耳元だけで小さく笑う。知ってるよ、私は言った。お前も、と、俺たちはみんな、共犯だろ？私は言った。「どうする？」なに？、と、一瞬遅れて聞き返した加奈子に、世界を、血に染めてみようか？笑った私のささやき声を加奈子は耳元に聞く。

御食向（みけむかふ）
南淵山之（むなみぶちやまの）
巖者（いはほには）
落波太列可（ふりしはだれか）
削遺有（きえのこりたる）
（巻九）

2018.02.20-03.02.

Seno-Lê Ma

シュニトケ、その色彩 中 二帖

<http://p.booklog.jp/book/122829>

著者 : Seno Le Ma

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/senolemasaki0923/profile>

ホームページ

<https://senolema.amebaownd.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122829>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト